

して判定される可能性があり、FDG PET を読影する際には十分に注意しなければならないことが示された。

演題5. 知的障害者の全身麻酔下歯科治療時における
経皮二酸化炭素分圧測定の有用性について
—動脈血ガス分析による測定値との比較—

○久慈 昭慶, 菊池 和子, 市川 真弓
熊谷 美保, 岡本 明子 佐藤 裕
城 茂治

岩手医科大学歯学部附属病院障害者歯科診療センター

目的：知的障害者の薬理的行動調節時、侵襲が少なく連続測定ができる経皮二酸化炭素分圧値 ($Prcco_2$) が、侵襲を伴ない、かつ連続測定ができない血液ガス分析による動脈血二酸化炭素分圧値 ($Paco_2$) の代わりとなりうるかを検証した。

材料・方法：気管内麻酔下に集中歯科治療を受けた知的障害者のべ14症例の患者の麻酔記録より、同時測定された $Prcco_2$ と $Paco_2$ 、22組を書き出して分析に供した。統計処理はまず、全体の標本22組 (W グループ) について、 $Prcco_2$ と $Paco_2$ の相関係数 r 、 $Prcco_2$ 値を説明変数 x 、 $Paco_2$ 値を目的変数 y とする回帰直線、そしてその決定係数 r^2 を求めた。つぎに患者を10歳未満 (Y グループ、のべ4名、7 標本) と10歳以上のグループ (O グループ、のべ10名、15標本) に分類し、それぞれの r 、回帰直線、 r^2 を求めた。

結果：患者の年齢構成は、W グループでは7～31歳 (19.2 ± 8.27 歳)、Y グループでは7～9歳 (8.00 ± 1.16 歳)、O グループでは17～31歳 (23.7 ± 4.47 歳) となっていた。統計結果は、W グループについては $r = 0.903$ ($P < 0.05$)、回帰直線は $y = 1.01x - 0.862$ で $r^2 = 0.815$ ($P < 0.05$) であった。Y グループでは、それぞれ $r = 0.935$ ($P < 0.05$)、 $y = 0.971x - 0.339$ 、 $r^2 = 0.873$ ($P < 0.05$) であった。O グループでは $r = 0.574$ ($P < 0.05$)、 $y = 0.474x + 19.9$ 、 $r^2 = 0.330$ ($P < 0.05$) であった。W グループでは $Prcco_2$ 値は $Paco_2$ 値とよく相関していた。また Y グループでも、よく相関していた。しかし O グループでは、その相関は低かった。

考察：W グループの結果および $Prcco_2$ の利点を勘案すると $Prcco_2$ は薬理的行動調節時での呼吸抑制程度推測に有用と考えた。大人の皮膚の厚さは、子供の皮膚に比較して、部位別の値が異なるため、今後 O グループの相関を高くするためには、部位別の考察が必

要と考えられる。

結論：薬理的行動調節時、 $Prcco_2$ は $Paco_2$ の代わりとなりうる。

演題6. 口腔インプラント室におけるインプラント治療

○伊藤 創造, 武部 純, 塩山 司
石橋 寛二, 横田 光正, 石川 義人
水城 春美

岩手医科大学歯学部附属病院口腔インプラント室

目的：現在、インプラント治療は予知性の高い確立された治療方法として認められ、患者の多様な要望に対する解決方法の一つと考えられている。岩手医科大学歯学部附属病院では、平成6年11月に附属病院診療センター機構として口腔インプラント室を設置し、顎口腔の機能回復を目的に治療を進めてきた。今回、これまで行われたインプラント治療内容について報告した。

対象と方法：平成6年11月から平成16年2月までに本学歯学部附属病院口腔インプラント室にてインプラント治療を開始した57名 (男性16名、女性41名) を対象にインプラント治療の内容について調査を行った。さらに治療例としてセンター機構としての口腔インプラント室が機能して治療を行うことが出来た、腸骨移植と即時埋入手術を全身麻酔下で行った症例を紹介した。結果・考察：インプラント治療を開始した患者数は平成10年度から増加傾向を示し、現在も増加している。インプラント埋入手術の症例数も平成12年度から増加傾向を示し、現在も増加している。インプラント室登録患者の年齢分布は50歳代をピークに40歳代、60歳代、30歳代の順であった。男女比では女性が男性の約2倍であった。インプラント埋入手術を行った患者の年齢分布は、50歳代が最も多く、ついで40歳代、30歳代、20歳代の順であった。また、インプラント埋入部位に関して、下顎が57%、上顎が43%、臼歯部が61%、前歯部が39%であった。さらに症例ごとの部位に関して下顎臼歯部のみの症例が15例、37%と最も多く、次いで上顎前歯部のみの症例と上下顎前臼歯の症例が6例ずつ14%であった。今回の報告は、他施設の報告と同様の傾向を示していた。また、腸骨移植、即時埋入手術を行った無歯顎症例についてインプラント治療により機能的、審美的回復が行われた。